

# 「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

この表は令和2年11月に実施した第8回大学院生生活実態調査の結果、「問題がある」、「改善の必要がある」、あるいは「他より優れている」と判断された事項を教育部ごとにとりまとめ、その対応計画とその計画についての進捗状況を示したものです。これら事項につきましては定期的に進捗状況を更新していく予定ですので、学生、教職員のみなさまにつきましてはお気づきの点や改善に係るアイデア等ございましたら、下記までお知らせくださいますよう、お願いいたします。

連絡先：徳島大学学生支援課  
E-mail：kyseikatuk@tokushima-u.ac.jp

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項（問題点や優れた点）	対応計画等		
創成科学研究科 地域創成専攻	大学事務室の対応に満足している割合が高い (57%)。	この調子で良い。	在学生との懇談会等を通して得た、学生からの生の声を参考として、引き続き問題点の把握とその改善に努め、今後も継続性が保たれるようにしたい。	在学生との懇談会等を通して得た、学生からの生の声を参考として、改善に努めている。
	大学の教育課程に満足している割合が高い (43%)。	この調子で良い。	在学生との懇談会等を通して得た、学生からの生の声を参考として、引き続き問題点の把握とその改善に努め、今後も継続性が保たれるようにしたい。	在学生との懇談会等を通して得た、学生からの生の声を参考として、改善に努めている。
	指導教員とのコミュニケーションは十分取れている。この割合が高い(71%)。	この調子で良い。	在学生との懇談会等を通して得た、学生からの生の声を参考として、引き続き問題点の把握とその改善に努め、今後も継続性が保たれるようにしたい。	在学生との懇談会等を通して得た、学生からの生の声を参考として、改善に努めている。
	語学力を高めることはしていない(100%)。	各指導教員に学生の語学学習への関心を促していただく。	外国語コミュニケーションに関する科目を必修科目として開講するとともに、引き続き各指導教員に学生の語学学習への関心を促していただく。	グローバル教育科目群を選択必修として1単位開講している。引き続き指導教員に各指導教員に学生の語学学習への関心を促していただいている。
	キャリア支援室を利用したことがない学生が多い (86%)。	普段から掲示などでキャリア支援室の利用を呼びかける。	普段から掲示などでキャリア支援室の利用を呼びかける。学部学生と比べて、大学院生は社会人学生が多いことも要因の一つと分析している。	キャリア支援に関する掲示について、学生にわかりやすいよう、配置を工夫している。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項(問題点や優れた点)	対応計画等		
創成科学研究科 臨床心理学専攻	研究環境については満足度が低い(どちらかという と不満足+あるいは不満足と感じている人は 55%)。	研究設備の不足については学部長懇談会などで具 体的な情報を提供してもらう。	大学院生との懇談会の席上にて意見聴取する予定 であり、学部学生と学部長との懇談会で出された 意見も参考に、機器の更新等も考慮しながら、研 究環境の維持・改善に努める。	大学院生との懇談会の席上にて意見聴取し、学部学生と 学部長との懇談会で出された意見も参考に、機器の更新 等を行った。
	現在の精神状態で落ち込みやすいと感じているひ との割合が高い(33%)。	普段から掲示などで健康支援センターや総合相談 部門の利用を呼びかける。	普段から掲示などで健康支援センターや総合相談 部門の利用を呼びかける他、研究指導計画書・報 告書を通じて、学生1人に対して複数の教員が定 期的に面談を行うことで、学生の不調等を早期発 見できるように努める。	キャンパスライフ健康支援センターの利用周知を行っ た。また研究指導計画書・報告書を通じて、学生1人 に対して複数の教員が定期的に面談を行った。
	研究テーマにはどちらかという不満足である (22%)。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお 願いする。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお 願いする他、研究指導計画書・報告書を通じて、 複数の教員が定期的に面談を行うことで、学生の 不満等について相談しやすい体制を整えるよう に努める。	研究指導計画書・報告書を通じて、複数の教員が定期的 に面談を行うことで、学生の不満等について相談しやす い体制を整えている。
	あまり学習していない+全然学習していない学生 の比率が高い(33%)。	各指導教員に対して大学院生の学習状況の確認を お願いする。	各指導教員に対して大学院生の学習状況の確認を お願いする他、副指導教員やアドバイザー教員 等、相談窓口となる教員を複数名設置し、学習指 導の徹底を計る。	指導教員に対して大学院生の学習状況の確認をお願いし た。研究指導計画書・報告書を通じて、複数の教員が定 期的に面談を行った。
	キャリア支援室を利用したことがない学生が多い (67%)。	普段から掲示などでキャリア支援室の利用を呼び かける。	普段から掲示などでキャリア支援室の利用を呼び かける。学部学生と比べて、大学院生は社会人学 生が多いことも要因の一つと分析している。	キャリア支援に関する掲示について、学生にわかりやす いよう、配置を工夫している。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項（問題点や優れた点）	対応計画等		
創成科学研究科 理工学専攻	大学院進学者は徳島大学からが多く、他大学や海外からは少ない。	学内外を問わず優秀な学生を安定的に確保するためにも、さらなる広報活動やホームページ等の充実をはかる。	広報委員会に引き続きホームページ等の広報活動の充実を図ってもらうよう依頼することとした。	HPを通して、研究成果発信や受賞等報告を継続的に行っている。改組後の英語版HPの充実を図っている。
	学生の7割程度がアルバイトをしているが、5割以上はその目的を「生活費や学費のため」と回答している。また、学生の5割程度は奨学金の受給を希望している。	指導教員などを通じて授業料免除制度の活用や民間の奨学金制度等の募集情報の周知を行う。	各コースで指導教員などを通じて授業料免除制度の活用や民間の奨学金制度等の募集情報の周知を行ってもらうこととした。	コースオリエンテーションをはじめ、コース内メーリングリスト等を通して学生委員より周知を図っている。教務システムのメッセージを通じた周知も継続的に行っている。
	「悩みや不安」について7割程度の学生は「就職や進路」と回答している。	ガイダンスなどにおいてキャリア支援室や学生相談室の利用を促す。各指導教員に対して引き続ききめ細やかな指導をお願いする。	各コースのガイダンス等においてキャリア支援室や学生相談室の利用を促してもらうこととした。	コース学生委員を通して周知を行うとともに、学生との懇談会においてもその利用を促している。
	教育理念や教育方針について4割程度の学生が「あまり知らない」または「知らない」と回答している。	パンフレット等の出版物やガイダンスなどにおいて教育理念と教育方針についての説明の充実をはかる。	各コースのガイダンス等において教育理念と教育方針についての説明の充実をはかってもらうこととした。	専攻全体およびコースオリエンテーションを通して説明を行っている。
	研究指導の内容や進め方については概ね好評である。研究指導の時間数については指導教員ごとのバラツキが大きい。	研究分野は多岐に渡るため統一した指導時間を検討する必要は無いが、各指導教員には指導時間の確保と指導内容の一層の充実をはかるようお願いする。	各コースにおいて引き続き各指導教員による指導時間の確保と指導内容の一層の充実をはかるようお願いすることとした。	引き続き指導時間の確保と内容充実をお願いするとともに、副指導教員、アドバイザー教員による助言を行っている。
創成科学研究科 生物資源学専攻	これまでに海外渡航経験のない学生が増加している。	コロナ下であるが、国際学会発表等について経済的支援をすることにより、より多くの学生が海外渡航できるように取り組む。	コロナ禍において海外渡航が困難であり、現状では難しいが、オンラインでの国際学会参加を促している。	コロナ禍の影響で海外渡航が困難である場合にはオンラインでの国際学会参加を促しているほか、現地開催のケースについては積極的な参加を促進する支援体制を検討している。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項(問題点や優れた点)	対応計画等		
総合科学教育部	前期課程では研究環境については満足度が低い(どちらかという不満、あるいは不満と感じている人は38%)。	研究設備の不足については学部長懇談会などで具体的な情報を提供してもらう。	大学院生との懇談会の席上にて意見聴取する予定であり、学部学生と学部長との懇談会で出された意見も参考に、機器の更新等も考慮しながら、研究環境の維持・改善に努める。	大学院生との懇談会の席上にて意見聴取し、研究環境の維持・改善に努めた。
	前期課程の研究指導に満足している学生の比率が高い(どちらかという満足、あるいは満足と感じている人は91%)。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお願いする。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお願いする。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお願いしている。
	後期課程では、研究テーマにはどちらかという不満である(17%)。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお願いする。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお願いする他、研究指導計画書・報告書を通じて、複数の教員が定期的に面談を行うことで、学生の不満等について相談しやすい体制を整えるように努める。	各指導教員に対して引き続ききめ細かい指導をお願いしている。研究指導計画書・報告書を活用している。
	後期課程では、あまり全然学習していない、あるいは全然学習していない学生の比率が高い(34%)。	各指導教員に対して大学院生の学習状況の確認をお願いする。	各指導教員に対して大学院生の学習状況の確認をお願いする他、副指導教員やアドバイザー教員等、相談窓口となる教員を複数名設置し、学習指導の徹底を計る。	各指導教員に対して大学院生の学習状況の確認をお願いしている。副指導教員やアドバイザー教員等、相談窓口となる教員を複数名設置し、研究指導計画書・報告書を活用している。
	後期課程の学生は睡眠時間が少なく(4-6時間未満の学生が83%)、気になる症状(頭痛、腹痛、下痢など)がある学生がいる。	生活習慣について、指導教員から助言する。症状については、心身の健康維持を目的としたキャンパスライフ健康支援センターの利用を促す。	生活習慣について、指導教員から助言する。また症状については、心身の健康維持を目的としたキャンパスライフ健康支援センターの利用を促す。	研究指導計画書・報告書を活用し、学生生活についても相談できる体制になっている。キャンパスライフ健康支援センターの利用周知を行った。
	後期課程の学生でアカハラの経験者の比率が17%である。	普段から掲示などで総合相談部門の利用を呼びかける。	普段から掲示などで総合相談部門の利用を呼びかけるとともに、副指導教員やアドバイザー教員と交流することで、コミュニティの多様性を図る。	普段から掲示などで総合相談部門の利用を呼びかけている。研究指導計画書・報告書も活用し、学生生活についても相談できる体制になっている。
	後期課程の学生は全員が総合相談部門を利用したことがない。	普段から掲示などで総合相談部門の利用を呼びかける。	普段から掲示などで総合相談部門の利用を呼びかける。	総合相談部門・キャンパスライフ健康支援センターの利用周知を行った。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項(問題点や優れた点)	対応計画等		
医科学教育部	調査結果をより正確に解析するためにはアンケートの回収率を上げることが必要と思われる。質問事項が多岐にわたって記入が煩雑なことが回収率の低い理由であるかもしれない。	質問事項を簡略化するなどの工夫を検討すべきであるが、医科学教育部だけではない全学的な取り組みの検討が必要である。	医科学教育部だけではなく全学的に必要な取り組みが必要なので継続して検討した。	各研究科のみの対策では、回収率のアップは容易ではないので、(全学)学生委員会などへ、回収率のアップの対策をどうするかについての検討を継続している。
	大学院における研究理念や教育理念について、十分に知らない学生や、研究内容に不満を持っている学生が少数ではあるが存在している。	大学院における研究理念や教育理念をさらに理解させるとともに研究指導を充実させて質の高い大学院教育を実践する方策を検討していくことが必要である。	大学院における研究理念や教育理念をさらに理解させるとともに、研究指導を充実させて質の高い大学院教育を実践することについて継続して検討した。	大学院の名称の変更をきっかけとして、今一度、その研究理念や教育理念を深く理解するようにして、研究指導をさらに充実させ、質の高い大学院教育を実践することについての検討を継続している。
	総合相談部門(学生相談室)、保健管理部門などの相談窓口が十分に利用されていない。キャリア支援室の利用率の低さが目立つ。	キャンパスライフ健康支援センター保健管理部門および総合相談部門(学生相談室)やキャリア支援室などの支援施設を積極的に活用していくための周知を促していく。	キャンパスライフ健康支援センター保健管理部門および総合相談部門(学生相談室)やキャリア支援室などの支援施設を積極的に活用するために周知を促すことを継続して検討した。	キャンパスライフ健康支援センター保健管理部門および総合相談部門(学生相談室)やキャリア支援室などの活用を進めるための周知の検討を継続している。また総合相談部門(学生相談室)を実際に利用した学生について、支援施設からの問い合わせに学生委員会と学生係が積極的に協力し、相談内容を踏まえ学生支援の充実に努めた。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項（問題点や優れた点）	対応計画等		
口腔科学教育部	(博士課程)の留学生の一部が、生活費のためのアルバイトをしている。	研究に専念できない要因となりうるので、公的、学部内の奨学金を積極的に活用してもらうよう努める。	学務係と協力し、奨学金への応募の通知のリマインドを複数回行い、周知の徹底を図っている。	第7回調査時直近のアンケートで51%だった奨学金受給率が第8回では85%に増加していたが、第9回では57%と元に戻っており、必ずしも効果があったとは言い難い。競争のある奨学金を安定して受給する効果的な方法は見当たらないので、応募できる奨学金の種類を増やす方向に情報提供を改善する。
	悩み、不安を持っている学生の相談相手は、前期課程では家族、友人、教員であるが、後期課程では、教員の比率が極端に下がっていた。	大学院でのメンター機能のさらなる充実に加え、副指導教員、アドバイザー教員との交流の頻度上昇を図る。	大学院教務委員会と学生委員会において、担任、副指導教員、アドバイザー教員制度の見直しに着手した。	指導教員、副指導教員、アドバイザー教員は研究指導に専念してもらい、それ以外の相談や指導を行う窓口とは分ける方向で検討を開始した。
	現在の精神状態でやる気が出ない者の割合が3%あった。	大学院でのメンター機能のさらなる充実に加え、副指導教員、アドバイザー教員との交流の頻度上昇を図る。	大学院教務委員会と学生委員会において、担任、副指導教員、アドバイザー教員制度の見直しに着手した。	研究指導以外の相談や指導を行う窓口を創設する方向で検討を開始した。
	後期課程で、アカハラを認識している学生が9%おり、割合として減少傾向にない。さらにそのうちの半数が状況を放置していた。	副指導教員、アドバイザー教員と交流を密にし、コミュニティの多様性構築を図る。	大学院教務委員会にそのような事案が発生することがないように依頼し、指導教授へ大学院教務委員会からの通達を行った。	指導教員への通達に加えて、研究指導に直接関与する教員とは別チャンネルの相談窓口を創設する検討を開始した。
	前期課程学生に、大学事務への不満が見られた。	学生と教職員とのコミュニケーションを増やすことを図る。	大学事務の対応は客観的に見て極めて献身的であることから、今以上に指導教員との日常のコミュニケーションを増やすよう務める。	教員と事務職員の職分の違いから、教員とのコミュニケーション充実だけでは改善が期待できず、人員削減で多忙を極める事務職員の質と量の充実が必要と感じさせられた。
	研究活動と研究指導においては概ね満足している結果であったが、後期課程学生に一部(3%)不満を持つ学生が見られた。その結果を反映してか、一部学生の所属大学院への満足も低い。	指導時間の短さを指摘する学生もいることから、よりきめ細かな指導体制の構築を図る。	大学院教務委員会と連携し、今以上に指導教員との日常のコミュニケーションを増やすよう務める。	指導教員に加えて副指導教員、アドバイザー教員にも、大学院生とのコミュニケーションを積極的に取るよう依頼した。
	国際能力(語学)に不安を持つ学生が多いが、語学学習得意欲は低い傾向にある。	積極的に国際学会参加を促し、国際交流の場に身を置くことを図る。	コロナ禍において留学生との対面交流の場が制限されており、現状では難しいが、オンラインでの国際学会参加を促している。	国際学会のオンライン参加は普及したが、それだけでは語学への苦手意識は改善しないようなので、対面でのコミュニケーションの再開を待って、その機会を増やすことを目指す。
	研究時間の短さを指摘する学生がいるが、社会人大大学院生が増加していることを反映していると思われる。	社会人大大学院生と一般学生を分けて分析する。	次回の分析時に検討を行う。	大学院生生活実態調査のアンケート項目間の相関分析の結果を元に検討を行う。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項（問題点や優れた点）	対応計画等		
薬科学教育部	COVID-19禍で就学・生活環境が変化した影響なのか、多くの学生が様々な不安・悩みを抱えている一方で、専門相談機関であるキャンパスライフ健康支援センターの利用が極めて少ない。	心身の健康維持管理を目的としたキャンパスライフ健康支援センターの有効利用を促す啓発活動・周知を行う。	心身の不調が見受けられる学生に対して、指導教員がどうすればよいかなどを、キャンパスライフ健康支援センター総合相談部門長を講師に薬科学教育部でFD研修会を行い啓蒙を行う。 また、個別に心の不安が見受けられる学生に相談窓口を案内している。	キャンパスライフ健康支援センター保健管理部門長を講師に薬科学教育部でFD研修会を行った。薬学部教員がキャンパスライフ健康支援センターの取り組み等を理解すると共に、心身の不調が見受けられる学生に対する対応等について学んだ。
	研究・教育の現状には概ね学生は満足しているが、後期課程で満足していない学生が増加していた。	不満を感じている具体的内容を把握し、改善に努める。	薬科学教育部修了予定者と教育部長との懇談会を通じて、学生の意見・要望の把握に努めた。今後も可能な限り、学生のニーズ把握のための調査等を行う予定である。	修了予定者と教育部長との懇談会を通じて学生の意見・要望の把握に努めた。今後も可能な限り、学生のニーズ把握のための調査等を行う予定である。
	依然として3割弱の学生が外国語修得の努力をしていない。	薬科学教育部では独自に薬学英語特論を必修科目として開講し、英語力強化に取り組んでいるが、今後も語学能力向上に努める。	「薬学英語特論」において、複数の外国人教員による授業を行い、英語学習への意欲の増進を図った。また、蔵本地区での外国人講師の講演会の案内を大学院生に積極的に行っている。	引き続き、「薬学英語特論」において、外国人教員による授業を行い、英語学習への意欲の増進を図る予定である。また、外国人講師による講演会を講義の一環とすることで大学院生の積極的な参加を促した。
	アンケート回収がWEBに変更になったことにより、回収率が従前から半分程度に大幅に低下した。	学生のニーズを的確に把握するために回収率の向上は不可欠であり、対策を検討する。	新型コロナウイルス感染症対応により、回収方法をWEBとした。研究室単位で入力への声かけを行うなど対応を検討する。また、社会人へのアンケート回収についても検討予定であるが、全学学生委員会でも実施方法などについて取組を要望したい。	各研究室の指導教員に研究室単位で入力への声かけを行うよう依頼した。社会人学生に対しても同様に指導教員からの声かけを依頼した。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項(問題点や優れた点)	対応計画等		
栄養生命科学 教育部	院生の研究は専門性の高い性格を持ち、求人・就職情報は各研究室・教育部経由で入手される場合が高いと思われることから、キャリア支援室を利用することが少ないと考えられる。	就職情報に高い専門性はもちろん重要なことだが、情報の多様性を向上させることは、院生が得る就職情報の幅の広さを生み、就職に有利になると考えられるので、キャリア支援室の有効利用の促進策を検討していく。	情報の多様性を向上させることが、院生が得る就職情報の幅を広げて、就職に有利になると考えられるので、キャリア支援室の有効利用の促進を継続して検討した。	情報の多様性をアップさせることが、院生が得られる就職情報の幅を広げ、就職活動に有利になると考えられるので、キャリア支援室の有効利用促進の検討を継続している。
	「指導教員とのコミュニケーションが全く取れていない」との回答はなかった。	「全くない」という回答結果は評価すべきもので、維持していけるよう検討する。	「全くない」という回答結果を維持できるよう検討を継続した。	「全くない」という回答結果は重要であるので、この結果を維持できるよう検討を継続している。
	本調査項目における「授業以外の自分で行う研究活動」の定義を明確にしていく。	本調査の今後の調査方法において、設問の方法を全学的に検討する必要がある。	本調査の今後の調査方法において、設問の方法を全学的に検討することを提案していけるよう継続して検討した。	本調査の今後の調査方法において、各研究科のみならず設問の方法を全学的に検討することを提案していけるよう検討を継続している。
保健科学教育部	学生が抱える悩みの解消の一つとして「研究時間」の確保が必要である。	就労活動が研究活動の障害とならないような支援策を検討する必要がある。	就労活動が研究活動の障害とならないように継続して検討した。	就労活動が研究活動の障害とならないような方策の検討を継続している。
	国内の国際学会参加と研究発表は増えたが海外での発表は少ない。国際学会への積極的な参加への継続的な支援が必要である。	語学力を高めるなどの取り組みを検討していく必要がある。コロナ禍で遠隔会議形式の学会開催が増えたことから、費用負担の面からも語学力向上のための機運が高まることにつながるよう期待したい。	語学力を高めるなどの取り組みを検討していく必要がある。コロナ禍で遠隔会議形式の学会開催が増えたことから、費用負担の面からも語学力向上のための機運が高まるよう継続して検討した。	語学力を高めるなどの取り組みは、さらに必要なので、検討していく必要がある。コロナ禍で遠隔会議形式の学会開催が依然増加傾向にあることから、費用負担の面からも語学力向上のための機運が高まるような検討を継続している。
	前回調査から改善が見られるが、アカデミックハラスメントが0になるよう対策が必要である。	アカデミックハラスメントが起こらない環境作りを検討していく。	アカデミックハラスメントが起こらない環境作りを継続して検討した。	アカデミックハラスメントが起こらない環境作りの検討を継続している。

「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項(問題点や優れた点)	対応計画等		
先端技術科学教育部 知的力学システム 工学専攻	経済的に困窮しており奨学金を希望する学生が半数近くみられる。	社会人でない学生に対して、指導教員より経済的な困窮状況を個別に確認し、必要に応じて奨学金などを紹介する。	令和3年度は、社会人でない学生に対して、指導教員より経済的な困窮状況を個別に確認した。また、学生委員より奨学金を案内した。	令和4年度においては、社会人でない学生に対して、指導教員より経済的な困窮状況を個別に確認し、RAに採用されるなど問題がないことを確認した。
	キャリア支援室を利用しない学生が相当数いる。	コース内掲示板、メール配信などを通してキャリア支援室を利用するよう啓蒙する。	メール及びコース内電子掲示板などによりキャリア支援室を利用するよう通達した。	コース就職担当から、キャリア支援室の利用について再確認した。コース内の就職情報と併用する場合に、コース内で周知している情報の方が希望企業にマッチしていると考えられるが、面接練習などの活用についても周知した。
先端技術科学教育部 物質生命システム 工学専攻	質問18で、奨学金の受給を希望しない学生が半数程度いるのは驚きである。	奨学金については、給付型の本来の奨学金と、返済・利子付きの教育ローンを別に設定した設問とすべきである。	総合教育センター学生支援部門学生生活支援室会議に検討を依頼する。	アンケート回答の年次データ蓄積の観点から、R4実施のアンケートにおいてもこれまで通り奨学金と教育ローンを分けていない。
	質問62で、研究指導に不満足な学生が全くいないのは素晴らしい。	現在の研究指導が良く、対応の必要はない。	—	—
	質問64で、研究テーマに不満足な学生が全くいないのは素晴らしい。	現在の研究テーマ設定が良く、対応の必要はない。	—	—
	質問72で、教育部・専攻に不満足な学生が全くいないのは素晴らしい。	創成科学研究科の修士課程・博士後期課程でもこの状況が続くことが望ましい。	—	—
	徳島県外の学生が比較的多く所属し交流が図れている。	特になし。	—	—
	睡眠が十分に取れていない学生が比較的多い。	生活指導をするよう教員に呼びかける。	教員に生活指導を図るよう通達した。	学生の日々の体調変化に注意するようにしている。
	授業の内容や進め方について概ね満足している。	特になし。	—	—
	指導教員とコミュニケーション不足を感じている学生がいる。	教員にコミュニケーション不足を感じている学生がいることを伝える。	教員にコミュニケーションを図るよう通達した。	研究指導計画書・報告書の提出が義務づけられていることも重なり、学生との積極的なコミュニケーションの機会は得られるようになったと考えている。

# 「令和2年度学生生活実態調査（第8回大学院生生活実態調査）」のフィードバックにかかるフォローアップについて

部局名	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等 (2022.3月HP公開内容)	対応計画実行の進捗状況等 (左記のフォローアップ)
	事項(問題点や優れた点)	対応計画等		
先端技術科学教育部 物質生命システム 工学専攻(生命テクノサイ エンスコース)	後期課程学生の海外もしくは国際学会での発表が少ない。	国際学会への発表を経済的に支援する取り組みを充実させる。	コロナ禍において海外渡航が困難であり、現状では難しいが、オンラインでの国際学会参加を促している。	直近2年間の当該専攻の学生(2名)の国際学会参加回数はゼロであった。しかしながら、2022年後半から出入国制限が緩和されたことに伴い、2023年は国際学会に挑戦する学生が増加すると予測している。引き続き、国際学会への参加を促していく。
先端技術科学教育部 システム創生 工学専攻	質問28、質問30:現在の精神状態について、博士前期課程ではおよそ3割の人が少なからず不安や悩みを持って学生生活を送っている。	指導教員は学生に対して「相談相手になれるよ」という雰囲気づくりに努める。 学生相談室を周知する。	各教員で雰囲気づくりに取り組んでいる。学生から学生委員に相談があった際は、指導教員や学生相談室との相談も勧めている。	引き続き各教員で雰囲気づくりに取り組んでいる。学生相談室との相談も勧めている。
	質問38、キャンパスライフ健康支援センター総合相談部門(学生相談室)を利用した人は2割ほどである。	学生相談室は気軽に利用できるサービスであることをアピールする。	学生から学生委員に相談があった際は、学生相談室との相談も勧めている。	学生からの相談に適宜対応するとともに、学生相談室を有効利用してもらうよう勧めている。
	質問61-72、研究指導について、全体的に博士前期課程より博士後期課程の学生の方が満足度が高い。	指導教員は博士後期課程の学生と前期課程の学生のコラボレーションが醸成されるような環境づくりに努める。	各教員で環境づくりに取り組んでいる。	引き続き学生との対話を通じて、各研究室での環境づくりに努めている。
	質問82、日本人学生の英語会話力は専攻間であまり差がない。専門用語を使った会話ができる語学力の習得は難しい。	学部授業「技術英語」の内容を充実させるとともに、研究室内で英語論文の読み書きの機会を増やす。	「技術英語」の充実(オンライン授業の工夫など)に努めている。各研究室内でも英語学習の充実に努めている。	「技術英語」の授業内容の充実・改訂を進めている。英語学習の意欲向上に取り組んでいる。
	質問100 キャリア支援室を博士前期課程学生は6割程度利用している。	キャリア支援室のカウンセリング担当者の拡充、改善を希望する学生の声を参考に対応する。	情報系には改善の希望などは寄せられていないことから、特に対応はしていない。	キャリア支援室の利用についての周知を今後も継続していく。
	奨学金関連の事務職員の対応が不親切、不快と思った学生がいる。	当該事務職員に対して対応の改善を要望する。	学生と教員等との懇談会においては改善要望が見受けられなかったことから、状況が改善されたと考えられる。よって、情報系として特に対応はしていない。	対応が改善されていると思われる。
	質問34の回答で、複数の学生がハラスメントを受けたと回答している。	教員間の情報共有、及び、学生への注意喚起を行う。	教員間での情報共有を行い、学生への注意喚起をお願いする。	教員間での情報共有を行い、学生への注意喚起を、指導教員、コース掲示板を通じてお願いしている。
	質問18で奨学金を希望する学生の割合が多い。	指導教員などを通じて、民間の奨学金等の募集情報の周知を徹底する。	奨学金についてのアナウンスを指導教員などを通じてお願いする。	奨学金についてのアナウンスを指導教員、コース掲示板を通じてお願いしている。